

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18500473

研究課題名（和文） 現代スポーツの公共性に関する文化社会学的研究

研究課題名（英文） Research on the Publicness of Contemporary Sports from the Viewpoint of Cultural-Sociology

研究代表者

菊 幸一 (KIKU KOICHI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号：50195195

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、現代スポーツの公共性の概念を文化としてのスポーツの観点から明らかにし、国際比較の視点を交えて、その成立の背景とこれから求められるスポーツの公共性のあり方を検討することである。結果として、国家的公共性から市民的公共性への転換を経て、現代スポーツのグローバルな文化性によって発揮される「新しい公共」の概念の重要性が指摘され、これを政策レベルで具体化していくことが重要であるとの結論を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify a concept of the public nature of the modern and contemporary sports from the viewpoint of the cultural sociology, to consider how ideal way of the public of the background of the approval and sports are asking for with an aspect of international comparison. As a result, we pointed out the importance of the concept of "new publicness" changing from national publicness to the civil one through a global culture of modern and contemporary sports. It is important to study how this concept demonstrates in the policy level in the future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2006 年度	1,500,000	0	1,500,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総 計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：スポーツ社会学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ科学（1402）

キーワード：現代スポーツ、公共性、文化社会学、文化、国際比較、公共圏

1. 研究開始当初の背景

(1) アテネ・オリンピックの驚異的な視聴率に見られるように、今日、現代スポーツは広く国民全体に浸透し、そのメディア・バリューは一層高まっているように思われる。し

かし、その一方で、現代スポーツの社会的価値は、メディアを中心とした政治的、経済的利害によって左右され、その影響がドーピングをはじめとして現代スポーツそれ自体を貶めたり、社会からの支持を失ったりする結果

を招く危険性をはらんでいる。すなわち、大衆化された現代スポーツにおける公共的な価値は、巨大な社会の利害構造との関係においてスポーツの側から、その公共的価値の何を、どのように守る必要があるのか、あるいは何を、どのように創造していく必要があるのかについて、再検討することが求められているのである。

(2) 前世紀(20世紀)におけるスポーツの公共的な価値は、近代スポーツの発展を促した英国パブリック・スクールの教育的資源をモデルとして、近代国家の国民形成にかかわる、いわば「上からの公共性」によって担保されてきた。我が国においても、近代先進国をめざすエリート教育の手段としてこのモデルが採用され、運動部活動を通じた伝統的価値として承認されてきた経緯がある。また、大衆レベルの教育的資源としての近代スポーツは、体育の内容としてその公共的価値を心身の健全な発達、及び全人格形成の手段として承認されてきた。そこには、近代スポーツの公共的価値が国民国家形成をめざす「上からの」政治的課題を達成する手段としてとられ、国家から守られた公共性としてその価値が承認されてきたのである。

(3) このような歴史的経緯のもとで、近代スポーツ制度や近代スポーツ組織を構成するスポーツ「界」が国家や企業、学校に対する依存体質を深め、現代スポーツに対する人びとの文化的関心に無自覚であり、文化としてのスポーツがもっている公共的な価値に無関心であったことは否めない事実であろう。ここでは、明らかにスポーツ・リベラリズムの伝統に支えられたアマチュアリズムが国家的な公共性を後ろ盾として維持されており、激動する現代社会のスポーツの新たな社会的機能を文化としてのスポーツから発揮する可能性を阻害している現状がみられる。これに対して現代スポーツは、高度大衆消費社会にあって、その文化的性格を「下からの」公共性として自律的に発揮し、現代社会における生活課題と政治課題とを収斂していく実践的、具体的可能性に拓かれていると考えられるのである。

(4) さて、スポーツ社会学の領域では、「文化としてのスポーツ」というフレーズがすでに一般化されており、またそのタームは一般社会においても徐々に広まりつつある。しかし、上記のような歴史的経緯から、文化としてのスポーツの考え方が、スポーツの公共性をどのように担保し、発展させていく可能性があるのかについては具体的に論じられていない。また、スポーツ文化が上記のような公共的文化としてどのような社会的機能を発揮

することで、新たな公共性構築の起点となりえるのかに関する本格的な文化社会学的研究は行われていない。

2. 研究の目的

(1) 「文化としてのスポーツ」が、なぜ、どのように「公共性」と結びつき、それがなぜ現代スポーツでは新たな公共性を構築することに結びつくのかに関する理論的課題を文化社会学的観点から明らかにし(文献的研究が中心、

(2) この新たな「公共性」と結びつく現代スポーツ文化における組織的、制度的な可能性を内外の事例調査(主に欧米を中心とする自立的なプロ・スポーツ文化および企業、地域、学校等とスポーツの文化的特性との新たな関係における公共性の萌芽)によって示しながら(海外調査が中心)、

(3) その結果を我が国の企業スポーツ、地域スポーツ、学校スポーツ等々の具体的なあり方(インタビューを中心とする現在の実態調査および資料収集による国内調査が中心)に適用して、現代スポーツが構築しうる新たな公共性構築の道筋とその実践的可能性を明らかにすること

3. 研究の方法

研究の目的で指摘したように、

- (1) の目的に対しては、文献研究
- (2) の目的に対しては、海外における資料収集とインタビュー調査
- (3) の目的に対しては、国内における資料収集とインタビュー調査が、それぞれ採用された。

4. 研究成果

(1) 研究1年次目の目的は、①文化としての「現代スポーツの公共性」概念の定義、②既存スポーツシステム関係者による現代スポーツのとらえ方に対する限界、③海外事例(イギリス)における現代スポーツの公共性に関する概念モデル、等々を明らかにした。①については、わが国のスポーツ概念が近代スポーツと体育概念の強固な癒着によって形成され、その呪縛から逃れられない現状およびシステムがあり、近代スポーツから現代スポーツへの変化をとらえる理念型をさらに検討していく必要性が示唆された。②については、1)との関連からわが国の既存スポーツシステムが体育的理念に基づくイベント中心型システムとなっており、各スポーツ組織が種目別大会運営組織の限界を有していること、またその限界に気づかない人的リクルート(運動部活動を基盤とするボランティア・リクルート)になっているため、そこにきわめて構

造的な問題が潜んでいることが明らかとなった。③については、イギリスにおいて階級的差異を前提とした明確なスポーツ政策（体育政策ではない）が意識され、スポーツの文化的要素がもつ社会的普遍性を公共的役割に転換しようとするパワーが存在していることが明らかとなった。しかし、2012年のロンドン・オリンピック開催は、メダル獲得をめざす国家的戦略の下でこれまでの公共性概念を高度化スポーツにおけるそれに集中させようとするパワーが働いていることも明らかになった。以上のような1年次の研究成果から、2年次では現代スポーツの文化性に関連する近代スポーツとの比較検討を中心に、わが国の体育システムとスポーツシステムとを概念的に峻別する社会学的議論を本格的に展開する必要があることが理解された。そのためには、わが国における文化とスポーツをめぐる歴史社会学的な受けとめ方の再検討を通じて、現代スポーツのシステム論的課題をさらに追求していく必要があった。

(2) 研究2年次の目的は、①諸外国の文献を中心に「文化としてのスポーツ」概念の歴史的経緯とその概念構成に関する分析及びデータベースの作成、②我が国のスポーツシステムにおける体育的言説の特徴とその背景に関する分析、③主に総合型地域スポーツクラブの現状と成果に関する教育的スポーツ文化言説の可能性と限界、等々を明らかにすることであった。①については、近代イギリスのレジャー・クラスとスポーツ教育からみた「文化としてのスポーツ」のとらえ方の違いが明らかにされ、②については、①におけるレジャー・クラスの欠落が近代日本のスポーツ概念の成立に大きな影響を及ぼし、近代体育の概念にスポーツが包摂される限界が明らかになったこと、③については、①にみられる歴史社会的影響が現代スポーツの公共性を市民的公共圏のそれとして解釈させることを拒む要因になっていることが明らかにされた。その結果、3年次においては、産・民アクターから同様なアプローチが必要とされることが理解された。

(3) そこで、第3年次では、現代スポーツの公共性を担う新たなアクターとして産・民の視点からのアプローチが必要であることから、現代社会における両アクターの課題を明らかにしつつ、両者からみた文化としてのスポーツの受けとめ方と需給関係の特徴を把握しようとした。その際、これまで明らかにしてきた体育的需給関係およびその言説的特徴との比較から、現代スポーツの公共性を担う両アクターの言説的特徴を明らかにしようとしたが、この点は未だに今後の課題として残された。

(4) 「本研究の成果は、2008年7月に開催された International Sport Sociology Association(ISSA)と日本スポーツ社会学会の共催による国際会議（京都大学）において一応の総括の機会が与えられ、これまでの研究成果を「スポーツと公共圏」のシンポジウムにおいてコーディネートするとともに、内外の研究者たちと本研究課題に対する資料収集や意見交換によってさらに補完された。以下は、本研究の成果に基づくテーマ設定の趣旨である。

（テーマ設定の趣旨）「公共圏」それ自体の概念はハーバーマスに由来するが、彼のこの概念は、市民的なコミュニケーションによる公共空間（市民的公共圏）の歴史的形成過程とその規範的概念の重要性を指摘したものであった。そこでは、近代政治体制とは別の、批判的公共圏として機能する近代的コミュニケーションとして、この公共圏を擁護しようとする立場があり、その可能性を追求することが強調された。それは、彼の「未完の近代」というテーゼとともに一般化されていると思われる。したがって、この批判的公共圏の機能からみれば、近代以降、顕著に現われた福祉国家体制は、その機能をむしろ著しく減退させ、上からの公共性を市民が一方的に受容し、これに依存する「受容的公共圏」を形成しているとされ、その歴史的な構造転換が鋭く批判されたのであった。これまでスポーツは、とくに近代スポーツの誕生以降、既成の国家的ナショナリズム、リベラリズム、アマチュアリズム等々との関係から多くの問題が論じられてきたが、ハーバーマスが提起したこのような「公共圏」の概念からラディカルなレベルで論じられることはあまりなかった。ところが、一方でこの概念は1990年前後の東西冷戦の終結とIT化、グローバル化という新たな社会変動による影響から、その公共的コミュニケーション空間（公共圏）の可能性を再び問い直され始めている現状にある。このような公共圏の変遷とスポーツとはどのように関連し、現代社会におけるスポーツはどのような公共圏として具体的に立ち現われているのであろうか。ここでは、スポーツと公共圏との関係について、①その担い手の階級や政治的性格の歴史社会的変遷から明らかにしながら、②現代社会におけるスポーツと公共圏の具体的な現象を各国のスポーツ政策から読み解き、③その比較社会学的な理解から近未来におけるスポーツ「からの」公共圏形成の可能性と課題とは何か、等々、について議論することが期待されるのである。

(5) 以上、簡単に本研究の目的とそのために行われた年次進行による研究内容を賞紹介した。本報告書の各論文は、それぞれ扱う内容を異にしながらも、これまで述べてきたよ

うな趣旨から展開されたものであり、独立しながらもつながっていると考えている。さて、本研究を通じて残された課題はあまりにも多いが、その一例として戦後日本で初めて本格的に起こった政権交代による「新しい公共」の概念とスポーツとの関係、とりわけスポーツ政策の公共性をどのように考え、展開していくのかという課題があげられよう。そこで、今後は、我が国のこれまでのスポーツ政策のあり方を社会的な「公共性」の観点から批判的に検討し、これからのスポーツと政治、政策の枠組みを再検討するとともに、欧米およびアジア圏におけるスポーツ政策の現状と課題を明らかにしながら、我が国の今後のスポーツ政策の目的、内容、方法について新たな公共性概念にもとづくビジョンを提言することが求められているように思われる。したがって、本研究を発展させていくために、①歴史社会的観点からスポーツと公共性の関係に関するこれまでとこれからを内外文献によって整理し、②この枠組みにもとづいて欧米及びアジアの現状と課題を調査し、③我が国におけるこれからのスポーツ政策システムをビジョンとして示す課題が残されていると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- ① 菊 幸一，子どもの遊びとスポーツの違い—ホイジンガの所論を中心に—。査読無，体育の科学，59 巻 5 号，2009，328—332。
- ② 菊 幸一，することだけがスポーツではない—体育で学ばせたい「知」とは何か。査読無，体育科教育，57 巻 10 号，2009，16—19。
- ③ 菊 幸一，学校運動部活動が抱える諸問題と生涯スポーツ。査読無，季刊教育法，162 号，2009，12—19。
- ④ 菊 幸一，スポーツ社会学における身体論の認識論的陥穽—肉体論的アプローチの可能性を探る—。査読有，スポーツ社会学研究，16 巻，2008，71—86。
- ⑤ Koichi KIKU and Ysuo Yamaguchi，Sport and Public Sphere (Symposium). ISSA 2008 5th World Congress Program & Abstract, 査読有，2008，p. 34。
- ⑥ 菊 幸一，新学習指導要領 中学校保健体育改訂のポイントと受け止め方。学研・教科の研究 保健体育ジャーナル，査読無，84 号，2008，1—5。
- ⑦ 菊 幸一，＜こども＞の誕生と現代体育—その考現学。査読無，女子体育，49 巻 6 号，2007，52—55。

- ⑧ 菊 幸一，運動・スポーツの文化的価値と「からだ」。中等教育資料，査読無，56 巻 7 号，2007，20—25。
- ⑨ 菊 幸一，理論編：スポーツ振興からスポーツプロモーションへ。査読無，みんなのスポーツ，29 巻 9 号，2007，12—14。
- ⑩ 菊 幸一，所謂「子供の体力低下」問題に対する危機意識を解剖する—社会的観点から—。査読有，埼玉体育スポーツ科学，2007，3 巻，55。
- ⑪ 菊 幸一：スポーツ社会学の現在。体育科教育，査読無，55 巻 12 号，2007，20—23。
- ⑫ 齋藤健司、加藤大仁、菊 幸一、中村祐司、真山達志，＜第 16 回大会報告＞スポーツ政策研究の領域と課題。体育・スポーツ政策研究，査読有，16 巻 1 号，2007，13—55。
- ⑬ 菊 幸一：クラブチームにおける子どものころへの対応—組織的スポーツの落とし穴—。保健の科学，査読無，48 巻 1 号，2006，34—38。

[学会発表] (計 23 件)

- ① 菊 幸一「体育学の社会的存立構造と課題—総合研究の理念と現実—」東京体育学会設立記念会（特別講演），2009 年 7 月 12 日，東京都（東京大学駒場キャンパス）
- ② Koichi KIKU，“The Scio-genetic characteristics and development of Sports and Leisure from the viewpoint of historical sociology.” 9th International Conference of Sports and Leisure Management, 2009 年 5 月 17 日，台湾、台北市（台湾師範大学）
- ③ Koichi KIKU, and Yasuo Yamaguchi，“Sport and Public Sphere” (symposium). ISSA 2008 5th World Congress, 2008 年 7 月 28 日，京都（京都大学）
- ④ 菊 幸一「いわゆる『ゆとり教育』からみた今日の体力問題」日本体育学会第 58 回大会体育社会学専門分科会シンポジウム，2007 年 9 月 6 日，兵庫県（神戸大学）
- ⑤ 菊 幸一「スポーツ政策研究の理念と現実—スポーツ『から』の政策ビジョンとデザインのために—」日本体育・スポーツ政策学会第 16 回大会シンポジウム「スポーツ政策研究の領域と課題」，2006 年 12 月 2 日，東京都（順天堂大学）
- ⑥ 菊 幸一「所謂『子どもの体力低下』問題に対する危機意識を解剖する—体力づくりの可能性に向けて：社会的観点から—」埼玉県体育学会第 2 回大会シンポジウム「子どもの体力低下問題を考える」，2006 年 12 月 3 日，埼玉県（埼玉大学）

【図書】(計 15 件)

- ① 菊 幸一, 丸善, 応用倫理学事典, 加藤尚武(編集代表), 「スポーツと暴力」 2008, pp. 870-871
- ② 菊 幸一, 世界思想社, 「からだ」の社会学, 池井望・菊幸一(編著), 「スポーツ社会学における身体論」 2008, pp. 67-94
- ③ 菊 幸一, 世界思想社, 変わりゆく日本のスポーツ, 大谷善博(監修)・三本松正敏・西村秀樹(編著), 「学校体育の『危機』と生涯スポーツ」 2008, pp. 186-203
- ④ 菊 幸一, 全国体育学習研究会(編・発行), 「楽しい体育」の豊かな可能性を拓く, 「現代社会における教育課題と『楽しい体育』—現代教育の課題に応える『楽しい体育』の可能性」「『楽しい体育』のカリキュラム構想」 2007, pp. 78-89
- ⑤ Kiku, K., Yale University press, *This Sporting Life : Sports and Body Culture in Modern Japan*. In William W. Kelly (eds.), “Bushidō and the Modernization of Japanese Sports.” 2007, pp. 39-53
- ⑥ 菊 幸一, 平凡社, 最新スポーツ科学事典, (社)日本体育学会(監修), 「公共性」「小項目「アソシエーション」「共同性」「公的領域」「コミュニティ」「自己同一性」「私的領域」「第3の道」「他者」「必要と欲求」「法の相互性」」 2006, pp. 291-293
- ⑦ 菊 幸一, 大修館書店, 現代スポーツのパースペクティブ, 菊 幸一・清水論・仲澤眞・松村和則(編著), 「スポーツ行政施策からスポーツプロモーション政策へ」 2006, pp. 96-112
- ⑧ 菊 幸一, ニチブン, デジタル版新しい小学校体育授業の展開: 理論編, 「生涯スポーツ」「生涯スポーツと体育」「教育の考え方の変遷と体育」 2006, pp. 8-15, pp. 16-25, pp. 87-94
- ⑨ 菊 幸一, 明和出版, スポーツプロモーション論, 佐伯年詩雄(監修) 菊 幸一・仲澤眞(編著), 「近代スポーツを超えて—近代スポーツの可能性と限界から考える—」 2006, pp. 16-32
- ⑩ Kiku K., Routledge, *Japan, Sport and Society: Tradition and change in a globalizing world*. In Joseph Maguire and Masayoshi Nakayama (eds.), “The Japanese baseball spirit and professional ideology” . 2006, pp. 35-54

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊 幸一 (KIKU KOICHI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号: 50195195